

平成18年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
瀬戸内海区水産研究所がとりまとめた結果 －

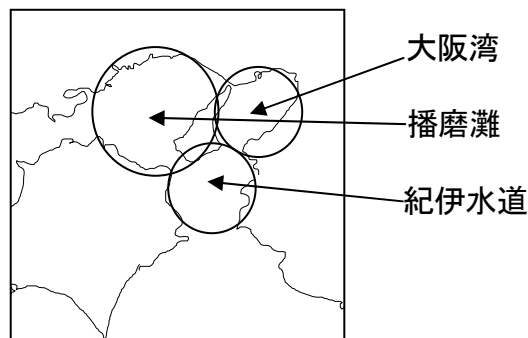
今後の見通し(2006年7月～8月)

(1) シラス(本年夏季発生群)

紀伊水道東部(和歌山県側)では2005年並みで、平年を下回る。
紀伊水道西部(徳島県側)では2005年を上回るが、平年を下回る。
大阪湾では2005年並みかやや上回り、平年を下回る。
播磨灘では2005年、平年を上回る。

(2) カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では2005年並みで、平年を上回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759
電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp
独立行政法人水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所 業務推進部
〒739-0452 広島県廿日市市丸石2-17-5
電話：0829-55-3406、ファックス：0829-54-1216、電子メール：feis-kiren@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び瀬戸内海区水産研究所のホームページ (<http://www.nnf.affrc.go.jp/>) に掲載されます。

参画機関

和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	香川県水産試験場
大阪府立水産試験場	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
岡山県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所

平成18年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し(2006年7月～8月)

(1) シラス(本年夏季発生群)

紀伊水道東部(和歌山県側)では2005年並みで、平年を下回る。

紀伊水道西部(徳島県側)では2005年を上回るが、平年を下回る。

大阪湾では2005年並みかやや上回り、平年を下回る。

播磨灘では2005年、平年を上回る。

代表漁協のシラス漁獲量から推定した各海域の漁獲量を指標とし(図1～3)、1985～2005年の平均値を平年値とした。

(2) カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では2005年並みで、平年を上回る。

巾着網標本船の漁獲量を指標とし(図4)、1985～2005年の平均値を平年値とした。

2. 漁況の経過(2006年5月～6月)および見通しについての説明

(1) シラス漁況

2006年5月～6月

紀伊水道東部(和歌山県側)では5月の漁獲量は前年の127%、平年の121%であった。6月15日現在の漁模様から判断すると6月も前年を上回り、平年並みかそれを上回ると予想される。

紀伊水道西部(徳島県側)では5月の漁獲量は前年の52%、平年の12%であった。6月中旬までの漁獲量は前年の790%、平年の80%であった。2006年5月の漁獲量は1985年以降、2002年に次いで少なかったが、6月に入って増加傾向にある。

大阪湾では2006年の漁は4月30日に始まったがシラスが魚探にほとんど映らなかったため、本格的な漁は5月の連休明けとなった。5月は前年の75%程度(暫定値)と不漁であった。6月中旬から大阪湾内で発生したと考えられる小型の個体がみられ始めたが、依然としてその量は少ない。

播磨灘東部(兵庫県側)ではシラスが魚探に映らなかったため、5月の出漁は取りやめとなった。6月5日から6日に出漁したが、漁獲量が少なかったため14日まで休漁した。15日に再開されたが、魚体のサイズが小さかったため25日まで休漁した。

播磨灘南西部(香川県側)では2006年の漁は5月20日から始まったが非常に低調であり、現在はほとんど出漁していない。なお、これまで許可期間は6月1日から12月31日までであったが、今年より5月20日から12月20日までとなった。

播磨灘北西部(岡山県側)では5月に漁はなく、6月上旬まで出漁していない。

(2) 産卵量

紀伊水道東部、紀伊水道外域東部では5月、6月とも前年、平年を下回った。紀伊水道西部では5月は前年を上回ったものの、平年を下回り、紀伊水道外域西部では前年、平年を上回った。

大阪湾では5月は前年の115%、平年の96%であった。6月は前年の1022%、平年の203%と前年、平年を大きく上回った。

播磨灘では6月は前年、平年を大きく上回った(香川・兵庫・徳島の卵稚仔調査集計結果、図5)。

(3) 今後の見通しの説明

シラス(本年夏季発生群)

黒潮は、5月以降潮岬で接岸傾向にあり、紀伊水道東部では暖水波及が継続して見られた。紀伊水道東部の産卵量は前年および平年と比較して少ないが、大阪湾から播磨灘南部にかけての産卵量が比較的多いことから、この発生群が内海系水の流出により紀伊水道に来遊する可能性がある。一方、紀伊水道西部では内海系水の南下傾向が強く、5月の漁は極めて低調であった。6月上旬には紀伊水道西部に断続的な暖水波及が見られ、漁獲量は増加傾向にある。しかし、連続して出漁すると1日1隻あたりの漁獲量が減少するとの情報が聞き取り調査から得られており、外海からの加入量は平年を上回るほど多くないと考えられる。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。来遊環境がよい年には好漁年が多いことから、外海発生群の補給の多さが大阪湾の好不漁に大きく影響すると考えられる。現在、暖水波及が弱いこと、および補給路である紀伊水道の和歌山県側での6月の漁獲量が5月と比べて減少してきていることから、外海発生群の大阪湾への来遊は前年と同様に期待できないと考えられる。しかし、卵の出現状況から大阪湾での発生群は前年、平年を上回ると推測され、これらが加入に成功すれば6月下旬頃から漁獲され始めると考えられる。

内海発生群が漁の主体である播磨灘においては、6月の水温が低いほど7～8月の漁獲量が多くなる傾向がある(図6)。また明瞭でないものの6月の産卵量が多いほど7～8月の漁獲量が多くなる傾向がある(図6)。2006年6月の水温は低く、産卵量は多かったことから(図5)、播磨灘全体としては7～8月の漁獲量は平年を上回ると予想される(図6)。

カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では漁期当初は前年発生の子魚、その後は本年の春シラス漁で漁獲の対象となった0才魚が、小・中羽として漁獲される。前年の8月以降に平年を上回る0才魚の漁獲があり、現在も比較的多くの1才魚が滞留していると考えられる。しかし本年の春シラス漁が不漁であったことから、前年並みになると考えられる。

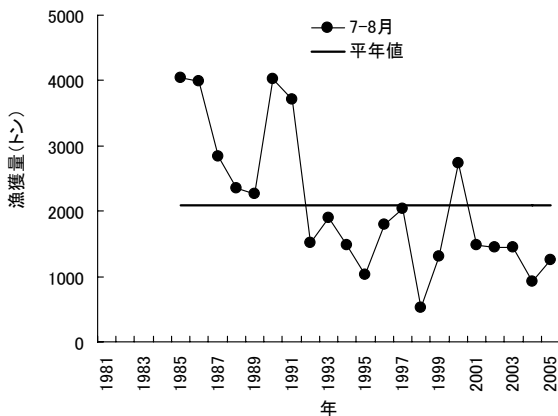


図1 紀伊水道のシラス漁獲量

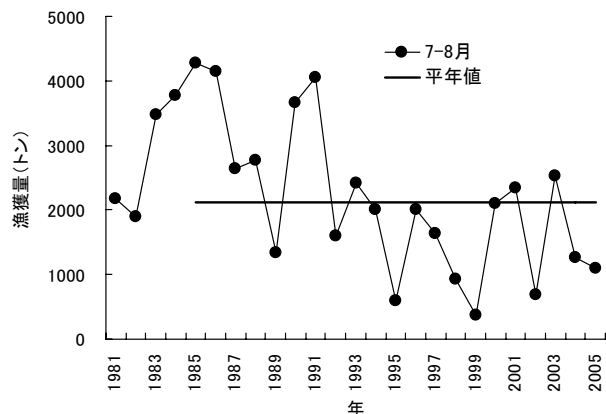


図2 大阪湾のシラス漁獲量

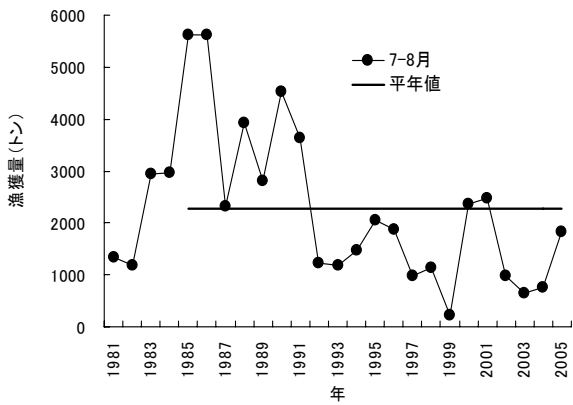


図3 播磨灘のシラス漁獲量

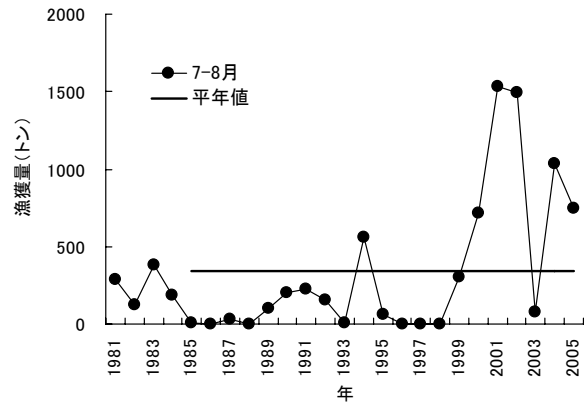


図4 大阪湾の巾着網標本船のカタクチイワシ漁獲量

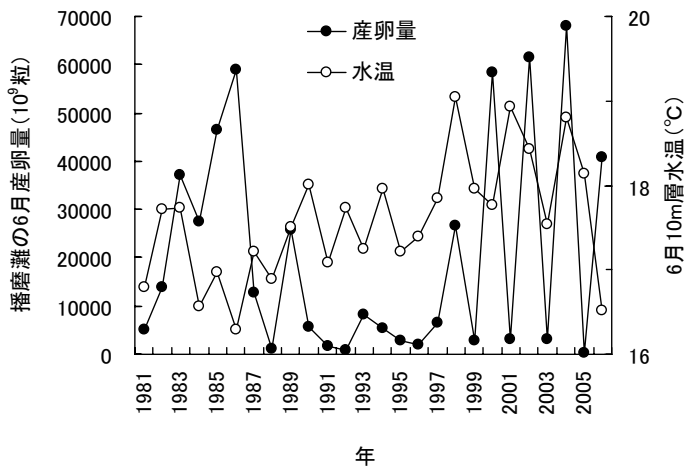


図5 播磨灘の6月の産卵量、10m層水温

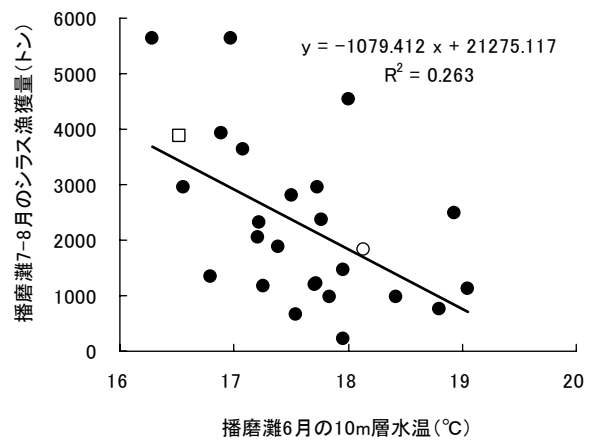
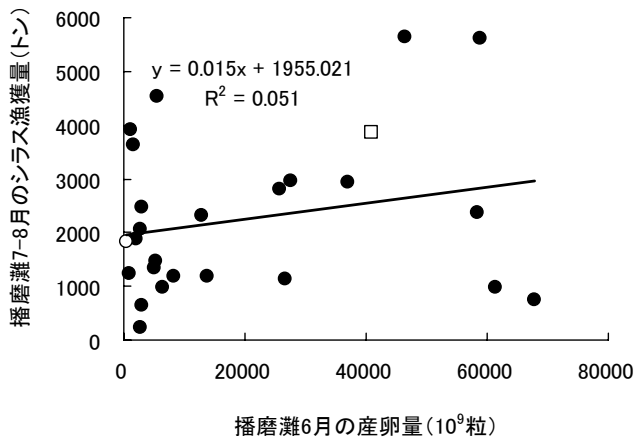


図6 播磨灘における6月の産卵量と7-8月のシラス漁獲量の関係(左図)および6月の10m層水温と7-8月のシラス漁獲量の関係(右図)

○は2005年の漁獲量、□は2006年の予測値である。2006年の予測値は産卵量と水温から求めているため、各図の回帰直線上にない。